

◆全国青年・女性漁業者交流大会

第 30 回 全国青年・女性漁業者交流大会

宮古農林水産振興センター 今道智也

1 目的

全国青年・女性漁業者交流大会（以下、「全国大会」という。）は、全国の青年・女性漁業者が、日頃の研究・実践活動の成果を発表するとともに、参加者間の交流により知識や情報を共有・進化させることで、水産業・漁村の発展と活性化に資することを目的として、平成7年度から開催されており、今年度で30回目を迎えた（JF 全漁連，2025）。

沖縄県では、令和6年11月6日に沖縄県青壮年・女性漁業者交流大会が開催され、伊良部漁業協同組合 小型船主会の久高一哲氏、糸満漁業協同組合 女性部の比嘉美鈴氏が活動実績を発表した。その結果、久高氏が沖縄県知事賞を受賞し、全国大会へのエントリーを決めた。比嘉氏は、発表者としての全国大会エントリーはかなわなかったが、一般傍聴で全国大会に参加した。

久高氏による今回の発表では、佐良浜を中心に発展してきた伊良部島の漁村の歴史を振り返りながら、現在の取組状況に触れ、今後の課題を伝える内容としたが、沖縄を代表する漁村である伊良部の魅力を伝えることも目的のひとつとし、資料の作成を支援した。また、普及指導員の活動目的は、発表がスムーズに行われるよう、補助を行うことが最も大きいですが、補助をするなかで伊良部島における漁業の現状への理解を深め、発表者とともに、他地区での先進的な活動に関する情報に触れ、課題解決策の検討等を共有することも併せて意識した。

2 方法

全国大会には、第30回 全国青年・女性漁業者交流大会開催要綱（以下「要綱」という。）に基づき、沖縄県漁業協同組合連合会会長による推薦書、発表者による出品財等を提出してエントリーした。

全国大会は、発表内容に応じて第1～第5の5つの分科会に分けて行われるが、推薦書において、希望する分科会を記載する必要がある。要綱によると、第5分科会（多面的機能・環境保全部門）は、漁村社会とその文化伝承を目的とした取組み、漁村特有の食文化、伝統行事の継承、といった内容が設定されており、久高氏の発表内容と合致するものが多いことから、第5分科会を第一希望としてエントリーしたところ、無事希望のとおり第5分科会での出場が決まり、令和7年3月4日に東京都中央区A P 日本橋（図1）において発表した。

3 結果

第5分科会は、漁業・漁村が存在することで発揮する多面的機能（都市住民との交流、環境保全等）、藻場・干潟の保全・再生、環境保全型養殖業の推進なども発表内容として設定されており、発表者8者のうち、漁村文化等に関する発表が久高氏を含めて3者、環境保全、藻場の保全・再生に関する発表が4者、両方の内容を包括した発表が1者であった。

久高氏による発表は、質疑応答も含めてス

ムーズに終えることができた。質疑の内容は、表1のとおりで、漁村文化伝承の取組みに対する評価が多く、質問は後継者に関するものが多かった。審査の結果、平成29年度の与那原・西原町漁協女性部（米丸，2017）以来となる全国共済水産業協同組合連合会会長賞を受賞した（図2）。

第5分科会における農林水産大臣賞は、北海道 ひやま漁業協同組合青年部奥尻支部（タイトル：離島水産業の3つの課題一島の漁師は何でもやる）が受賞した。当該発表は、課題の分析が的確で、課題解決に対する取組状況とその成果が顕著であり、新たな取組みと今後の展開への期待を持つことができる内容で、大変興味深かった。

4 考察

久高氏による発表は、一定の評価を得たものの、現在の取組みが他者と比較してやや弱い印象を受けた。また、2日目には、各分科会で農林大臣賞を受賞した5者の発表が行われたが、成果を出している取組みは、総じて地域内の他者を巻き込んだものが多く、行政、漁業者、関係団体の連携の重要性を感じた。久高氏本人は他者の先進的な発表に衝撃を受けていたようだが、これからの課題解決に向けていくつかアイデアが浮かんできたようで、貴重な機会となったように感じた。

発表の補助を通して、伊良部島の漁村としての発展やかつお一本釣りの歴史を理解するとともに、生き餌を獲る追込網漁の後継者不足や、さらなる漁村の魅力発信など、課題を整理することができた。今後は全国の先進事例も参考にして、関係者での連携強化をサポートしつつ、地元の意向に寄り添った支援を続けていきたい。

最後に、本大会の発表を進めるにあたり、沖縄県水産課の中田祐二主幹、米丸浩平主任技師、漁港漁場課の加藤美奈子主任技師、沖縄県栽培漁業センターの白樫未来研究員、伊良部漁業協同組合の中村信彦理事、小林将監事、具志堅光氏、具志堅恵氏、仲間安里氏、伊良波淳世氏、奥原尤紀氏、下地司氏、植松大輔氏、隆祥丸船員各位、糸満漁業協同組合女性部比嘉美鈴副部長、株式会社浜口水産の濱口美由紀代表取締役には有益な助言と激励をいただいた。記して謝意を表する。

5 引用

米丸浩平，2017：平成29年度全国青年・女性漁業者交流大会．平成29年度水産業改良普及活動実績報告書，5-6．

JF全漁連，2025：第30回 全国青年・女性漁業者交流大会．



図1 発表会場の様子



図2 全国共済水産業協同組合連合会の

楠田勇二会長と記念撮影をする久高氏

表 1 質疑応答、審査員コメントの内容

質問者	質問内容等	回答
長谷成人審査員	伊良部島は宮古島とはまったく雰囲気の違い、個性が目立つ島である。キャラクター性が強い漁村で、遠洋まで出て行った歴史がそうさせていると思う。引き続き個性を発揮できる取組みを続けて欲しい。	—
	農業とのつながりが面白かったが、加工残渣がマンゴーの受粉に活用される、とはどういうことか。	マンゴーは加工残渣に集まってくるハエの媒介によって受粉させている。
	(水産庁の) 係員のときに一度だけ、室戸沖でかつお一本釣り船に乗せてもらったことがある。群れに当たらずに釣れずに残念だった。狂うような喜びを感じることはできなかったが、発表にあったお祭りでの一本釣り体験はどのようにしているのか。	漁港内で船を動かして、竿先に魚を縛り釣り上げる疑似体験のようなもの。それでは魅力が伝わり切らないと思うので、生き餌を畜養するいけすに、ツムブリなどの、大型になり長めに生かすことができる魚種を入れ、それを釣ってもらうことを考えている。
牧野光琢審査員	発表を通じて豊かさの考え方を教えてもらった。地元の名物となっており、伝統行事の写真を見ても(漁業者は)地元のスターでカッコいい。後継者は多いのか。	後継者はいない。今のところ増える予定がなく、私自身は10年くらい漁業に携わっているが、まだ若い方。魅力の発信ができていないと感じている。全体的に年齢層が高く、最近10代が一人入った。さらなる魅力の発信ができればと思っている。
	(後継者を確保するには) 何が一番の課題なのか。収入か、労働条件か。	漁は日帰りなので、労働条件は楽になってきているように思う。収入の面は大きいと思う。楽しみは感じてもらえると思うが、収入に関しては経営者の努力が必要。
	(宮古地域の) 家賃の上昇について、なぜここまで急に上がっているのか。	伊良部大橋の開通が大きいと思っている。観光客が増え、観光業が発展し、地価が上がり、家賃も上り、という状況。私自身も賃貸に住むのは難しいくらい。
	橋がかかると、それくらい 島全体の経済に影響があるということ。	—
相沢孝義審査員	(伊良部島が) 魅力的な場所だということがよくわかった。パヤオの歴史も初めて知った。担い手について、島外から挑戦してみたいという新規就業者や希望者は増えていないのか。	潜水漁など、一本釣り以外にも含めると、やってみたいという方は、年間で10名ほど来ている。受け入れ体制がうまくいっておらず、相談があっても、その話を漁業者知らないこともあり、着業につながっていない。今後はうまく連携体制を作ることができれば就業者は増えると思う。
	魅力的でやりたいという方はいるのだろうかと思ったが、行政の後押しや繋ぎの役割をしてくれるなど、体制ができていないということか。	まだそういったことはうまくできていない。
	生食がおいしそうだったと思ったが、空輸にかかる輸送コストは負担になったり、競争力に影響したりしないのか。	(伊良部島は) 島民が5,000人以下で、地元での販売力には限界がある。例えば、(1回の操業で) 2トン以上獲ってくると(魚が) あふれてしまう。加工に回してもお金になるまでに時間がかかってしまう。 これらのことから、沖縄本島や県外に送っている。地元での魚の単価と比べても、島外のセリに出せばペイできる。カツオやマグロがないところの隙間を狙って送っていく。他地域と釣れる時期がずれていることもある。これらの取組みで何とか生計を立てている状況。
	関東でも食べることはできるのか。	タイミングによっては可能。(伊良部島から送って) 1日半程度あれば着く。